

友人の不快感情調整に関わる要因の検討¹⁾

—女子青年を対象に—

木野和代²⁾ 鈴木有美²⁾ 速水敏彦

【問題と目的】

自己や他者の感情について理解し、適宜調整できる能力は、社会的環境に適応するために、延いては精神的健康を維持するために重要であると考えられる。というのは、感情からの情報を処理する認知過程は、対人関係におけるストレスを軽減したり、他者からのソーシャル・サポートを引き出すなどといった、環境に適応するための能力と考えられる (Salovey, Mayer, Goldman, Turvey, & Palfai, 1995) ためである。Salovey & Mayer (1990) は、これらの自己や他者の感情へ注意を向け、それらを特定したり調整する能力を *emotional intelligence* の枠組みで捉えようとしている。

emotional intelligence の構成要素は、感情の評価および表出、感情の調整、感情の利用と大きく3つある。これらのうち前者2つについては、自己の感情に関してのみならず、他者の感情に関する能力としても言及されている。ここから、他者感情を認知したり、調整したりする能力も、適応的な社会生活を営むために要求される能力であるといえよう。そこで、鈴木・木野・速水・中谷 (1999) は、特に、他者の不快感情に注目し、その気づきから調整に至るまでの過程を明らかにしようとした。そして、自己の場合とは異なる要因として共感性 (特に他者の感情からの影響の受けやすさ) が関与していることを見いだしている。しかし、この他にも他者の不快感情調整を行うか否かに関わる要因として、不快感情を抱えている他者との関係や不快感情に関する信念などが考えられる。

Mayer & Gaschke (1988) は、気分をどう評価するかという認知傾向の違いによって、その後の調整の仕方が変わってくるのではないかと述べている。彼らによれ

ば、不快な気分を統制不可能で長く続く受け入れがたいものであると評価するのと、その逆の認知をする場合とでは、心の平静に与える影響が大きく違ってくるのである。この認知傾向の違いは、自己の不快感情について評価する場合のみならず、他者の不快感情について評価する場合にも応用可能なものであろう。特に、向社会的行動と人格特性としての内的・外的統制志向性との関連についての研究も報告されており (e.g., 竹村・高木, 1987), 不快感情の統制可能性に関する信念について検討を進めることは、なぜ他者の不快感情を調整しようとするのかという動機を明らかにするうえで有益であると思われる。

また、不快感情を抱えている相手との関係も調整行動を左右するものと思われる。例えば、親しい相手である方が心理的コミットメントが高く、共感的反応が生じやすいため、より調整行動が起こりやすいと考えられる。したがって、不快感情を抱えている相手が、見知らぬ人や単なる知り合いである場合よりも、より親しい間柄である友人の場合の方が調整しようという試みがなされやすいであろう。そこで、本研究では、青年期における友人関係の重要性がたびたび指摘されていること、また、友人とのつきあい方には男女差があり、特に女子青年にとって友人関係は最も中心的な問題である (e.g., 落合・佐藤, 1996) といったことから、不快感情を抱えている相手との関係として、女子青年における友人関係に注目する。

現代青年に関しては、しばしば友人関係の希薄化が問題とされ、相手に働きかけないことがごく普通の接し方であるとされている (e.g., 松井, 1990)。これに関して兵頭 (1999) は、友人に働きかけないことは、「働きかけると傷ついたり傷つけたりするのでしない (信頼感の低下)」、「相手に立ち入らないことや甘えないことはマナーであり、礼儀として働きかけない (自律性の重視)」という友人関係に関する異なった2種類の態度により動機づけられているとしている。現代青年の友人関係をとりあげる上で、これらの態度を考慮に入れ検討を行うこ

1) 本研究は、日本心理学会第64回大会において発表された内容に加筆・修正したものである。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

とにより、相手の不快感情の調整へ至る過程をより正確に把握できるものと思われる。

共感性と他者の不快感情の調整の関連については、鈴木ら（1999）の研究において検討されているが、共感性の中でもその構成要素である他者感情からの影響の受けやすさ（被影響性）のみしか扱われていない。向社会的行動との関連においてなされた研究では、共感性の側面として自己指向的情緒反応と他者指向的情緒反応が扱われており、どちらも向社会的行動を導くことが可能だが、その動機に違いがあることが明らかにされてきた（e.g., Eisenberg, Fabes, Murphy, Karbon, Smith, & Maszk, 1996）。したがって、本研究でも共感的反応の指向性を考慮して、他者の不快感情調整に関わる要因の検討を進める。

以上のことから、本研究では第一に、女子青年の友人関係に焦点を当て、友人の不快感情調整に関わる特性的要因として、不快感情の統制可能性に関する信念、友人関係における満足感、友人関係に対する態度、共感性をとりあげ、調整行動との関連について検討することとする。

本研究の第二の目的は、友人の不快感情を調整する理由の種類を検討することである。既述のとおり、鈴木ら（1999）の研究において、友人を含めた他者の不快感情を調整しようとするか否かには、特性的な共感性の高さが少なからず影響していることが示された。では、実際に調整行動を試みる場合、それはどのような動機から行われるのであろうか。その理由には様々なものがあると思われる。例えば、不快感情を抱いている他者に対する同情的・愛他的理由から調整行動がとられる場合もあれば、同情的反応というよりも、他者が不快感情を抱いていると自分も不快であるため、他者の不快感情を調整することにより自分の不快感情を調整しようとする場合もあると考えられる。

友田（1996）は落ち込んでいる人を見るときにさめる理由として（実証的なデータを得てはいないが）、①相手の要求にしたがって、②返報性、③愛他性、④規範性、⑤他者からの評価をあげるため、⑥自分が心地よく生活するための6つを提案している。また、向社会的行動に関する研究でも、向社会的行動が試みられる動機の種類がなされている。なかでも、竹村・高木（1987）は、向社会的行動と人格特性との関連をより明確に説明するためには、これらの動機についてより深く検討していくことが必要だと述べている。本研究においても、具体的調整理由を検討することは、今後、他者の不快感情調整を試みるに至る過程をより詳細に捉え、解釈していくための一助となるものと思われる。

【方法】

〈被調査者〉 調査対象は、女子短大生および専門学校生202名であった。このうち、7名分の回答には著しい不備がみられたため分析対象から除外した。したがって、分析に用いられたのは195名分の回答であった（平均年齢 = 19.4歳, SD = 1.47歳）。

〈調査用紙〉 調査用紙は、(1) 多次元共感性尺度、(2) 友人関係の様相に関する質問、(3) 友人の不快感情調整に関する質問、(4) 不快感情に関する信念をたずねる質問、および、(5) 友人関係態度尺度から構成されていた。ただし、設問(2)(3)(4)の一部については、本研究の分析の対象外とした。以下、本研究の分析で用いる各設問の内容について説明を加える。

(1) 多次元共感性尺度：鈴木・木野・出口・遠山・出口・伊田・大谷・谷口・野田（2000）による尺度を再検討し、全60項目の改訂版尺度を作成した（Table 1参照）。回答は、「1：全くあてはまらない」から「5：非常によくあてはまる」までの5件法にて求められた。

(2) 友人関係の様相に関する質問：「普段一緒にいる友人」の数、「普段一緒にいる友人」とともに行う活動の種類、その友人関係における満足度についてたずねた。このうち本研究の分析対象とされたのは、満足度についての質問のみである。友人関係における満足度の測定にあたっては、兵頭（1999）による友人関係満足感尺度を用い、「普段一緒にいる友人」との関係について「1：全くあてはまらない」から「5：非常によくあてはまる」までの5件法にて回答を求めた（Appendix 1参照）。

(3) 友人の不快感情調整に関する質問：まず、友人が不快に感じている時、その不快な気持ちを変えるために、友人に対して何らかの働きかけをしようかどうかたずねた。回答は、「する」「しない」「時と場合による」の選択肢から一つを選択させた。なお、データ入力の際、これらの回答にはそれぞれ1, 2, 3の値が割り当てられた。さらに、「する」と回答した被調査者には、働きかけをする理由について自由記述で回答を求めた。その他、「する」と回答した被調査者には、具体的な働きかけの方法や働きかけをして後悔したことがあるかどうかについてもたずね、「しない」もしくは「時と場合による」と回答した被調査者にも、対応するような質問を行ったが、これらの回答は本研究では分析の対象外とした。

(4) 不快感情に関する信念をたずねる質問：不快感情に関する信念として、不快感情に対する態度、不快感情の統制可能性、不快感情の持続性などをたずねる7項目を作成し、これらの項目について被調査者自身の考えにあてはまるものを全て選択させた。このうち本研究の分

Table 1. 多次元共感性尺度の項目および因子分析結果

No.	項 目	F1	F2	F3	F4	F5	F6
＜第1因子：自己指向的情緒反応 ($\alpha = .81$)＞							
50.	自分が嬉しいのか相手が嬉しいのか、わからなくなってくる ことがある。	.743	.324	-.014	.119	-.032	.131
58.	喜んでいる人がいれば、親しい人ではなくても、喜びを分かち 合いたいと思う。	.681	-.036	-.003	-.017	.098	-.153
23.	喜んでいる人を見てると、自分が嬉しかった時のことがよみが えってくる。	.666	-.052	.081	-.138	.023	.014
52.	友達が困っていると、まるで自分が困っているような気がしてく る。	.641	-.002	-.080	.148	.033	.091
25.	周囲に喜んでいる人がいれば、すぐに気づくことができる。	.526	-.171	.122	-.238	.096	.102
13.	苦しんでいる人を見ると、以前、自分が苦しんでいた時のことを 思い出す。	.476	.055	.196	-.030	.105	-.058
*48.	喜んでいる人を見ていても、その人と同じような気持ちにはなら ない。	-.464	.298	-.004	.028	-.083	.240
21.	人の意見をいつの間にか自分が考えたことのように思ってい がちだ。	.439	.100	.195	.257	-.155	-.113
35.	他人が怪我をして痛がっているのを見ると、自分も痛いような気 になることが多い。	.412	-.159	.002	.169	-.029	-.279
47.	苦しんでいる人を見てると、重苦しい気分になる。	.408	-.071	.218	.128	.068	-.098
#12.	人の意見を聞いているとき、それが自分の意見と同じであると思 うことが多い。	.365	.121	-.105	.122	-.106	.171
＜第2因子：他者指向的情緒反応 ($\alpha = .73$)＞							
*53.	他人が何を考えていても、私には関係のないことだ。	.150	.734	.006	-.224	.165	-.057
*33.	他人が失敗しても同情することはない。	.029	.632	-.120	-.028	.014	.001
*36.	他人の気持ちにあまり関心がない。	.144	.560	-.060	-.331	-.130	-.165
*31.	悩んでいる友達がいるても、その悩みを分かち合うことができ ない。	.059	.547	-.074	.023	-.232	-.208
20.	苦しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	.298	-.500	-.060	.217	-.024	-.014
*38.	他人の考え方を理解するのは苦手だ。	.111	.498	.029	.230	-.149	-.268
*15.	映画や小説の登場人物の気持ちの変化についていけないことがよ くある。	-.044	.432	-.162	.125	.244	-.321
*6.	見知らぬ人が嬉しそうにしているのを見ただけで、自分も嬉しく なることはない。	-.311	.418	-.063	.053	.061	.207
＜第3因子：想像性 ($\alpha = .82$)＞							
9.	空想することが好きだ。	-.060	-.018	.784	.061	-.025	.037
37.	面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分 に起きたらと想像する。	.202	.011	.729	-.092	-.009	-.049
*57.	空想するのは現実的ではないのであまりしない。	.247	.233	-.655	-.081	-.121	.150
26.	演劇や映画を見た後には、自分がその登場人物の1人だったらと 感じる。	.304	.176	.628	.011	.050	-.028
*42.	小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない。	-.036	.044	-.586	-.055	-.061	-.079
40.	感動的な映画を見た後は、その余韻にいつまでも浸ってしまう。	.200	-.237	.529	-.036	-.012	-.142
10.	映画や本の主人公とともに、喜んだり悲しんだりする。	.218	-.284	.527	-.019	-.158	.190
*27.	良い本や映画に完全にのめり込んでしまうことは、きわめてまれ である。	.172	.236	-.518	.163	.176	.033
#1.	自分に起こることについて、繰り返し、夢見たり想像したりする。	-.042	.050	.479	.000	.124	-.115
＜第4因子：被影響性 ($\alpha = .77$)＞							
59.	物事を自分一人で決めるのが苦手だ。	-.151	-.021	.034	.738	.080	-.007
29.	まわりの人がそうだとすれば、自分もそうだと思う。	.151	.058	.011	.709	.012	.061
*16.	自分の信念や意見は、友人の意見によって左右されることはない。	-.043	.187	.057	-.605	.179	.026
*46.	他人の感情に流されてしまうことはない。	-.192	.121	.043	-.583	.240	.040
3.	自分の感情は周囲の人の影響を受けやすい。	-.017	-.067	.175	.540	-.213	.082
#7.	人が苦しんでいると、かわいそうだと思う。	-.006	-.267	-.050	.444	.086	.106

友人の不快感情調整に関わる要因の検討

＜第5因子：視点取得 ($\alpha = .73$)＞							
34. 相手を批判する前に、自分が相手の立場だったらどう感じるかと想像してみようとする。	-.041	.111	-.049	-.003	.735	-.212	
18. 常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。	-.018	-.133	-.007	.052	.676	.107	
4. 人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	-.038	.095	.106	.271	.587	.186	
2. 他人が何をしたいかすぐ察知できる。	.021	.143	.124	-.211	.531	.138	
28. どんな問題にも2つの面があるから、その両方を見るようにつとめている。	.122	.134	.067	-.254	.515	-.013	
45. 自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	.074	-.071	-.169	.069	.470	-.043	
8. 友だちのことを理解しようとするときには、向こうから見るとどう見えるのかを想像することがある。	.123	-.002	.165	.001	.442	.039	
14. 人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	.316	.006	.067	-.167	.440	-.121	
＜第6因子：他者理解力 ($\alpha = .43$)＞							
*39. 他人の立場から物事を考えるのが、むずかしいと思うことがある。	.335	.070	-.046	.047	.037	-.630	
49. 自分は、友人のことはよく知っている。	-.024	-.171	-.053	.104	.141	.480	
44. 人の気持ちを理解するのに苦労することはない。	.331	.065	-.263	-.277	-.291	.391	
11. 私は思いやりのある人間だ。	-.005	-.139	-.067	.322	.182	.370	
#41. 自分が落ち込んでいるときに、他人の喜びを理解することはできない。	-.058	.310	.328	.232	-.104	.362	
56. 流行に流されやすい。	.271	-.054	-.207	.265	-.071	.357	
＜残余項目＞							
55. 人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる。	.472	-.352	-.012	-.151	-.052	-.005	
60. まわりに困っている人がいると助けてあげたくなる。	.427	-.356	-.115	.182	.052	.042	
5. まわりの人が落ち込んでいると、なんとなく不快になる。	.322	.232	.311	.066	.101	.076	
51. 友人が喜んでいるときには、一緒に喜んであげられる。	.306	-.293	-.219	.036	.229	-.032	
17. 他の人の願いがかなうと、自分もかなえばいいのと思う。	.013	-.348	.131	.093	-.100	-.026	
22. 人が何かを欲しがっているのを見ても、自分は欲しくならない。	-.160	.370	.097	-.472	.023	.065	
43. 物事を決めるには、みんなの反対意見をよく聞いてからにしようとする。	.012	.196	-.012	.414	.372	-.128	
30. 周囲に悩んでいる人がいても、気づかないことが多い。	-.115	.321	.100	.329	-.226	-.275	
19. 人に話をするとき、相手の立場に立って、その人がわかるように考えながら話をするではない。	.148	.209	.015	.119	-.343	.021	
24. 人の心の動きに敏感である。	.147	-.202	.209	.171	.249	.149	
32. 他の人が今どのような気持ちかが、その人の様子やしぐさからわかる。	.139	-.039	-.018	-.147	.308	.325	
54. 相手がどう感じているかを自分も同じように感じることができる。	.269	-.031	-.091	.102	.209	.303	
	因子間相関	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
	F 2	-.41					
	F 3	.20	-.05				
	F 4	.28	-.08	.12			
	F 5	.29	-.30	.06	-.06		
	F 6	.16	-.10	.01	.01	.11	

注1：*は逆転項目を示す

注2：#は α 係数の検討結果により削除された項目を示す

析対象とされた項目は、統制可能性に関するもので、「不快感情を修復することは難しい（統制不可能）」「自分の働きかけにより、友人の不快感情を解消できると思う（統制可能・対友人）」であった。得点化に際しては、これらの各項目が選択された（同意が示された）場合は1点を与え、選択されなかった場合には0点を与えた。

(5) 友人関係態度尺度：兵頭（1999）によって作成された、友人関係に対する2種類の異なる態度を測定する尺度で全14項目からなる（Appendix 2参照）。2種類の態度とは、自律的態度（相手に立ち入らないことや甘えないことはマナーであり、礼儀として働きかけない）および不信的態度³⁾（働きかけると傷つけたり傷つけられたりするのではない）で、それぞれ友人に働きかけないことを動機づけるものだと考えられている。回答は、「1：全くそう思わない」から「5：非常にそう思う」までの5件法にて求められた。

＜実施時期＞ 調査は、2000年1月、各校において講義時間中に一斉に行われた。所要時間は20～30分程度であった。

【結果と考察】

1. 各個人特性と調整との関わり

1-1. 共感性尺度、友人関係満足感尺度および友人関係態度尺度の因子構造

まず共感性尺度について因子分析（主成分法）を行った。固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から、6

3) 兵頭（1999）は、この因子を“信頼的態度”と命名しているが、この因子は、本来「友人に働きかけると傷つけたり傷つけられたりするのではない（信頼感の低下）」という態度を意味するものである。本研究では概念の混乱を避けるため、あえて“不信的態度”と命名した。

因子を抽出し、プロマックス回転を行った（Table 1）。因子分析の結果、ただ一つの因子に対する因子負荷量の絶対値が.35以上であることを基準に項目を選択し、この基準に満たない項目は削除された。各因子の解釈を行ったところ、その項目内容から、第1因子は“自己指向的情緒反応”，第2因子は“他者指向的情緒反応”，第3因子は“想像性”，第4因子は“被影響性”，第5因子は“視点取得”，第6因子は“他者理解力”とそれぞれ命名できるのではないかと考えられた。 α 係数は第1因子から順に.81, .73, .82, .77, .73, .43であった（ α 係数を検討した結果除かれた項目あり）。なお、第6因子は α 係数が.43と低く、残余項目による因子と考え分析から外した。

友人関係満足感尺度および友人関係態度尺度については、作成者である兵頭（1999）の報告に従い、主因子法による因子分析（回転の際にはバリマックス回転を実施）を行い、その因子構造を確認した。その結果、友人関係満足感尺度は1因子構造であり、 α 係数は.88、友人関係態度尺度は第1因子が“自律的態度”，第2因子が“不信的態度”， α 係数はそれぞれ.71, .73であった。これらの結果は、兵頭によるものとほぼ一致する。

以上の因子分析の結果から、各因子を構成する項目の評定値の合計点を項目数で除算することにより各下位尺度得点を算出した。各下位尺度得点の平均値および標準偏差をTable 2に示す。

1-2. 各個人特性が調整行動の生起に及ぼす影響

(3) 友人の不快感情調整に関する質問について、友人が不快に感じているとき、その不快な気持ちを変えるために何らかの働きかけをするかどうかという設問に対する回答の集計を行った。「する」と回答した者は89名、「しない」と回答した者は5名、「時と場合による」と回答した者は98名、無回答は3名であった。そこで、友人の不快感情調整を「する」と回答した群および「時と場合による」と回答した群を対象として、この2群を判別

Table 2. 各下位尺度得点の平均値および標準偏差

	M	S.D.	項目数	α 係数	N
多次元共感性尺度					
自己指向的情緒反応	3.25	0.590	10	.81	191
他者指向的情緒反応	3.50	0.543	8	.73	185
想像性	3.57	0.701	8	.82	187
被影響性	3.32	0.745	5	.77	194
視点取得	3.26	0.527	8	.73	191
友人関係満足感尺度	3.85	0.709	7	.88	190
友人関係態度尺度					
自律的態度	3.08	0.632	6	.71	187
不信的態度	2.50	0.578	8	.73	189

Table 3. 友人の不快感情調整に影響を及ぼす要因 (ロジスティック回帰分析)

変数名	B	S.E.	Wald	df	p	R	Exp (B)
自己指向的情緒反応	-0.336	0.412	0.007	1	.935	.000	0.967
他者指向的情緒反応	-1.260	0.452	7.787	1	.005	-.161	0.284
相像性	0.290	0.318	0.830	1	.362	.000	1.336
被影響性	-0.220	0.276	0.631	1	.427	.000	0.803
視点取得	-1.137	0.424	7.180	1	.007	-.153	0.321
友人関係満足感	-0.509	0.299	2.891	1	.089	-.063	0.601
自律的態度	1.079	0.356	9.192	1	.002	.180	2.943
不信的態度	-1.034	0.431	5.760	1	.016	-.130	0.356
信念 (統制不可能)	0.933	0.385	5.878	1	.015	.132	2.542
信念 (統制可能・対友人)	0.189	0.383	0.244	1	.621	.000	1.208
(定数)	8.871	2.951	9.038	1	.003		

する、言い換えれば友人の不快感情を調整することに躊躇するのはどういった要因が大きく影響するかを探るために、ロジスティック回帰分析を行った。なお、説明変数としては、共感性、友人関係満足感、友人関係態度、不快感情の統制可能性に関する信念がとりあげられた。

定数項のみを含んだ回帰モデルに対する全ての説明変数を含めたフルモデルの対数尤度差の検定統計量は χ^2 (10, N=161) = 39.92, $p < .001$ であり、モデルの判別可能性が支持された。決定係数については Nagelkerke $R^2 = .29$ であった。また、Hosmer-Lemeshow の適合度検定により、モデルがデータに適合していることが確認された [χ^2 (8, N=161) = 5.47, $p = .706$]。予測正答率は、調整すると回答した群71.43%、時と場合によると回答した群77.38%、全体では74.53%であった。各説明変数に関する結果を Table 3 に示す。

Wald 検定の結果、共感性の“他者指向的情緒反応”“視点取得”、友人関係態度の“自律的態度”“不信的態度”、不快感情の“統制不可能性”に関する信念がこの2群の判別に役立つことが示された。他方、共感性の“自己指向的情緒反応”については、オッズ比により結果変数との関連が低いと考えられた。これにより、共感性の情緒的側面である情緒反応の中でも、特に他者指向的な情緒反応傾向が高く、また、認知的側面である視点取得能力の高い者ほど、無条件に友人の不快感情を調整しようとすると考えられる。この結果は、これまでの共感性と向社会的行動との関連についての研究からの知見と整合するものであり (e.g., 渡辺・衛藤, 1990), 本研究で扱った友人の不快感情を調整するための働きかけが、援助行動として認知されていることも示唆している。

鈴木ら (1999) が確認している、共感性の被影響性の側面が他者の不快感情調整に与える影響については、今回確認することができなかった。これは、本研究では特

に友人関係に限定したためとも考えられるが、今回用いた共感性尺度の被影響性を測定する項目数が、5項目と他の下位尺度と比較して少なかったこともあり、測定上の問題である可能性を否定できない。今後、被影響性の下位尺度を改良した上で、不快感情を抱えている他者との関係性の影響についてさらなる検討が必要であろう。

友人関係に対する態度については、友人に対する不信的態度の高い者ほど友人の不快感情を調整しようとし、逆に、自律的態度の高い者ほど友人の不快感情調整に対して躊躇するという結果となった。後者については、自律的態度の高い者は、相互の自律性を重視するため友人に対して働きかけをしないのだとする兵頭 (1999) の知見と一致する。他方、前者については、不信的態度の高い者は、友人に対する信頼感が低下しているため友人に働きかけをしないという兵頭の知見と一致しない。しかし、普段の生活で最も重要とされる友人関係を維持していくために、信頼感を向上させる、もしくはさらなる信頼感の低下をくいとめるために、あえて働きかけの援助行動をとると考えることは可能であり、今後さらに検討を重ねていきたい。

不快感情の統制可能性に関する信念については、一般に「不快感情を修復することは難しい」という信念を持っている者ほど、友人の不快感情調整に対して躊躇することが示された。本研究では統制志向性が直接扱われたわけではないが、これは、内的統制志向者に比べて外的統制志向者の援助率が低いというこれまでの向社会的行動に関する研究の知見 (e.g., Midlarsky & Midlarsky, 1976) に整合するものとして捉えることが可能ではなかろうか。さらに、友人の不快感情を自分の働きかけにより解消できると考えるかどうかについて、今回有意な結果が得られなかった点を考え合わせると、援助を行う動機が従来指摘されてきたような有能感や義務感からくるものではないとする竹村・高木 (1987) の主張を支持

するものと解釈できよう。

2. 調整する理由の分類

友人の不快感情を調整する具体的な動機を検討するために、働きかけをする理由についての自由記述の分類を試みた。したがって、ここで分析対象とされたのは、この質問に対する回答を行った者、つまり、(3) 友人の不快感情調整に関する質問について、友人が不快感情を抱いているときにそれを調整するための働きかけを「する」と回答した被調査者89名のみであった。

分類に際しては、前述の友田(1996)の記述を用い、①相手の要求にしたがって(相手の要求)、②返報性、③愛他性、④規範性、⑤他者からの評価を上げるため(他者評価)、⑥自分が心地よく生活するため(利己性)の6カテゴリーを用意した。評定者2名は、89名の自由記述がそれぞれ上記6カテゴリーのうちのいずれにあてはまるかを評定した。Table 4に各カテゴリーに分類された回答数を示す。

回答の中には6カテゴリーのうち2つにあてはまると思われる回答がいくつかみられたため、これらは6カテゴリーとは別に分類した。④規範性として分類された回答は、人間関係一般についての規範ではなく、友人関係に限定された規範について言及するものであった。記述が短すぎたため回答者の真意を測りかねるものや、質問の意味を取り違えているものなど、分類不可能な回答もあった。

評定一致率は85.4%であった。評定者間で分類が異なった回答については、協議により最終的な分類カテゴリーを決定した。

次に、①～⑥の各カテゴリーに回答した人数に偏りがあるかどうか調べるため、 χ^2 検定を行った。その結果、カテゴリー間で有意な人数の偏りがあることがわかった

Table 4. 友人の不快感情調整理由の分類結果

分類カテゴリー	回 答 数
①相手の要求	0
②返報性	7
③愛他性	20
④規範性	4
⑤他者評価	0
⑥利己性	21
③ + ⑥	8
④ + ⑥	1
分類不能	21
無回答	7
計	89

$[\chi^2(5, N=52)=47.25, p<.01]$ 。

具体的には、③愛他性、⑥利己性にあてはまる回答の出現頻度が高いことがみてとれる。友人の不快感情調整が向社会的行動に含まれると考えれば、向社会的行動の促進動機としては「愛他心」や「共感」が多くあげられるという植村(1999)の指摘と一致した結果が得られたといえる。また、⑥利己性を調整の理由とする回答も同じくらい多くみられたことから、友人の不快感情調整は、純粋に愛他的な理由のみから起こるものとはいえない側面も持ち合わせていることが推察される。つまり、友人が不快であると自分まで不快になるため、または自分の周りの雰囲気が悪くなり居心地が悪くなるため、友人の不快感情を調整しようとするといったことがありうるものがうかがえる。ただし、この点に関しては、本研究では「他者」を友人に限定したことに起因するかもしれない。他者を見知らぬ相手などとした場合には、その状況を回避することがより容易になるため、本研究とは異なった結果が得られる可能性がある。

なお、少数ではあったが、③愛他性、⑥利己性の双方に言及した回答もみられ、友田(1996)の主張どおり、両者は必ずしも二者択一的なものではなく個人の中に共存しうるものであることがみてとれる。

松井(1997)は思いやり意識の理由の検討のなかで、義務や規範など理性的理由を多くあげる者を「理性優位型」、同情や共感など情緒的理由を多くあげる者を「情緒優位型」とし、アメリカなど他の4カ国に比べて日本では「情緒優位型」の若者が多いことを指摘している。そして、これが単に発達段階の問題ではなく、情緒的な思いやり意識を持っていることは日本の若者の特質だと述べている。本研究において、③愛他性にあてはまる回答数が④規範性よりも多かったことは、松井の知見と一致するものであろう。

自由記述の回答には、①相手の要求、⑤他者評価にあてはまるものが全くみられなかった。しかし、これにより友人の不快感情調整にはこれらの理由が働かないと即断することは早計である。今後、段階評定法などにより回答を求めた場合には、こうした理由の存在が認められるかもしれない。

【討 論】

本研究では、女子青年を対象に、不快感情を抱いている友人に対して、その不快感情を調整するための働きかけをするか否かを左右する個人特性要因、および、調整を行う具体的理由の検討を行った。その結果、共感性の他者指向的情緒反応および視点取得、友人関係における自律的態度および不信任的態度、不快感情の統制不可能性

に関する信念が、他者の不快感情調整を行うか否かを決定する上で重要な個人特性要因であることが見いだされた。また、調整を行う具体的理由として、多くの場合、愛他的理由と利己的理由のいずれかが強く働いていることが示唆された。本研究により、他者の不快感情に気づいてからその調整をしようとするまでの過程をより正確に予測する上で、有益な情報が得られたといえよう。

また、現代青年の友人との関わり方という点では、友人に対する働きかけの有無を決定する要因として自律的態度と不信的態度の重要性を再確認することができた。さらに、少なくとも女子青年の場合には、相手の不快感情調整のための働きかけを全く行おうと思わない者はほとんど見うけられなかったものの、約半数が働きかけをするかどうか躊躇していることが見いだされた。これが現代青年の友人関係に限られた特徴であるかどうかの判断は、今後の研究を待たねばならないが、こうした研究は、対人関係の希薄化が問題視されている現代青年の、友人との関わり方や友人関係に対する態度を知る手がかりとしても意義深いものであったと思われる。

しかし、今後の課題もいくつか残されている。今回はデータ数の問題もあり、具体的調整理由の違いを生み出す個人特性要因などは検討できなかった。今後データ数を増やし、さらに研究を重ねていきたい。また、調整のための働きかけをする人のみならず、働きかけをしない、もしくは躊躇する人についてその理由を探っていくことで、調整を試みるか否かに関わる要因の検討、および、現代青年の友人との関わり方の理解においてより有益な情報がもたらされるのではないかと思われる⁴⁾。さらに、今回は女子青年のみを対象に分析を行ってきたが、友人とのつきあい方には性差があるとの指摘もあることから、今後は、男子青年も併せてデータを収集し、検討していく必要がある。

【引用文献】

Eisenberg, N., Fabes, R.A., Murphy, B., Karbon, M., Smith, M., & Maszk, P. 1996 The relations of children's dispositional empathy-

related responding to their emotionality, regulation, and social functioning. *Developmental Psychology*, 32, 195-209.

兵頭恵子 1999 「友人に働きかけないこと」は適応か？ (6) - 友人関係態度および友人間相互作用, 友人間ストレスイベント, 友人間満足の関連 - 日本心理学会第63回大会発表論文集, 752.

松井 洋 1997 低い日本の若者の思いやり意識 中里至正・松井洋(編著) 異質な日本の若者たち プレーン出版 (pp.133-170).

松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 (pp.283-296).

Mayer, J.D., & Gaschke, Y.N. 1988 The experience and meta-experience of mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 102-111.

Midlarsky, M., & Midlarsky, E. 1976 Status inconsistency, aggressive attitude, and helping behavior. *Journal of Personality*, 44, 371-391.

落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.

Salovey, P., & Mayer, J.D. 1990 Emotional intelligence. *Imagination, cognition, and personality*, 9, 185-211.

Salovey, P., Mayer, J.D., Goldman, S.L., Turvey, C., & Palfai, T.P. 1995 Emotional attention, clarity, and repair: Exploring emotional intelligence using the Trait Meta-Mood Scale. In J.W. Pennebaker (Ed.), *Emotion, disclosure, and health*. Washington DC: American Psychological Association. (pp.125-154).

鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 2000 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 -心理発達科学-, 47, 269-

4) 「時と場合による」と回答した被調査者に対して、働きかけをする・しないを決定する要因を自由記述形式でたずねたところ、相手が不快になった原因や内容、その深刻さ・不快の強さによるという回答、自分が相手の力になれるかどうか、巻き込まれたくない、自分が踏み込んでいいことかどうか、相手が放っておいて欲しそうかどうか、友達による、その時の自分の気分による、などといった回答がみられた。今回はこれら

の要因がどう行動を方向づけるのか(働きかけを促進するのか抑制するのか)までは質問していないため、これ以上の言及は控えるが、これらの記述から、今後他者の不快感情調整のための働きかけを行うか否かを検討する際には、鈴木ら(1999)においても指摘されている、相手が不快になった原因の他にも、友人関係の質、調整に必要なスキル、自分の感情状態、などを考慮することが有効ではないかと考えられる。

- 279.
- 鈴木有美・木野和代・速水敏彦・中谷素之 1999 自己と他者に関するメタ・ムード - 不快感情の調整過程に焦点を当てて - 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 119-129.
- 竹村和久・高木修 1987 向社会的行動の動機と内的・外的統制志向性 教育心理学研究, 35, 26-32.
- 友田貴子 1996 他者を動かす感情 - 「落ち込み」への「なぐさめ」に焦点をあてて - 対人行動学研究, 14, 33-36.
- 植村里絵 1999 向社会的行動の生起過程に関する探索的研究 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 173-185.
- 渡辺弥生・衛藤真子 1990 児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響 教育心理学研究, 38, 151-156.

(2000年9月16日 受稿)

ABSTRACT

An examination of the regulation of friends' negative mood among female adolescents

Kazuyo KINO, Yumi SUZUKI, and Toshihiko HAYAMIZU

The purposes of the present study were (1) to examine the various factors that generated regulation of friends' negative mood: empathy, beliefs about negative mood, and attitudes to friendship, and (2) to explore the specific reasons for regulation of friends' negative mood. One hundred and ninety-five female students in a college or vocational school completed a set of questionnaires to measure (a) empathy, (b) relationships with friends, (c) regulation of friends' negative mood, (d) beliefs about negative mood, and (e) attitudes to friendship. The results clarified that the any action to friends in a negative mood was associated with empathy (especially other-directed affective reaction and perspective taking), unreliable attitude to their friendship, autonomic attitude to their friendship, and the belief about uncontrollability of negative mood. It was also found that many of the participants were motivated to regulate their friends' negative mood either altruistically or egoistically. These results would contribute to a good understanding of the process for regulation of friends' negative mood and the companionship in female adolescence.

Key words: regulation of friends' negative mood, empathy, beliefs

友人の不快感情調整に関わる要因の検討

Appendix 1. 友人関係満足感尺度〔兵頭（1999）当日配布資料より引用〕

No.	項目
	1. 友人に十分に受け入れられていると感じる
	2. 友人との関係はうまくいっている
*	3. 友人関係が重荷である
	4. 友人と気持ちが通い合っていると感じる
*	5. 友人から取り残されているように感じる
	6. 友人との関係には満足している
	7. 友人と一緒にいるときは、とてもリラックスできる

注1：*は逆転項目を示す

注2：「普段一緒にいる友人」との関係について5段階で評価

注3：No.は本研究で用いられた質問紙における各項目の提示順序である

Appendix 2. 改訂版友人関係態度尺度〔兵頭（1999）当日配布資料より引用〕

No.	項目
＜自律的態度＞	
	2. 友人の個人的な問題に対して、自分の方から意見を言うべきではない
	3. 友人関係では、お互いに立ち入れる範囲をわきまえなければならない
	4. 友人同士でも、相手に甘えるのはよくない
*	8. 友人同士なら、相手の個人的な事柄にも自分から進んで助言するのは当然のことだ
	12. 友人同士でも、お互いのプライバシーには立ち入るべきではない
	13. 友人同士でも、お互いの個人的な領域に踏み込むべきではない
＜不信的態度＞	
	1. 友人に深入りすると、自分が傷つくことになる
	5. 友人を信用すると、自分が損をすることもある
	6. 友人でも相手をだましたり、ぬげがけしたりすることはある
*	7. お互いにぶつかりあい傷つけあうようなことがあったとしても、友情は壊れないものだ
*	9. 本当に困ったときやつらいときに頼れるのは、友人である
*	10. ほとんどの人は友人によって支えられているものだ
	11. 友人に対して嘘をつくのは、時には当然のことである
*	14. 友人とはどんな時でも、利害や損得に関係なくつきあえるものだ

注1：*は逆転項目を示す

注2：No.は本研究で用いられた質問紙における各項目の提示順序である